

# Essay

Sapiarc.com

2013年11月21日(2013-8)

## ケネディ暗殺から 50 年

一昨日の11月19日(火)、新しくアメリカの駐日大使になったキャロライン・ケネディ (Caroline Kennedy) が、丸の内の明治生命館の前から皇室専用の馬車で皇居に行き、天皇陛下にオバマ大統領からの信任状を奉呈した。彼女は、故ジョン・ケネディ大統領の長女 (本当は次女) で、ケネディが暗殺されたとき、5歳だった。あの可愛かった少女が今では55歳の「おばさん」になっていることに、私は時の流れを感じた。失礼だが、彼女の容姿は、母親のジャクリーン(Jacqueline)ほどではない。しかし、気さくな人柄には好感が持てそうだ。

彼女は正式に結婚しており、夫の名前は Edwin Arthur Schlossberg だ。博物館の学芸員だったようだが、多分もう退職しているので、彼も東京に来るらしい。彼らには、既に成人している子供が3人いる。彼女は結婚後も自分の姓を変えなかったのだそうで、彼女を Caroline Kennedy Schlossberg と呼ぶのは正しくない。アメリカでは、そういうことが認められているのだらう。ただし、子供たちの姓は Schlossberg だそうだ。

今年の11月22日(アメリカ時間)は、現職のアメリカ大統領だった故ジョン・ケネディ (John Fitzgerald Kennedy) が暗殺されてから50年になる日だ。50年は相当長い期間だが、私には昨日のここのように思われる。ケネディ暗殺と2001年9月11日のニューヨークでの大事件は、私自身にとっては、どちらのショックが大きかったかわからない。

忘れもしない、1963年11月23日の朝7時過ぎ、私は、まだ寝床のなかに居たところを、母に叩き起こされて、この事件を知った。母は、NHK テレビの午前7時のニュースで、この事件を知り、早速私に知らせたのだ。博士課程3年だった私は博士論文を書いている最中で、夜遅くまで起きていたため、この時間にはまだ眠っていたのだ。

ケネディは、11月22日昼の12時30分過ぎに、テキサス州ダラスでこの忌まわしい事件に遭遇したのだが、時差があるため、日本では11月23日の午前3時30分のことだったはずだ。元々保守的な連中 (というよりも、早い話、世界的に見れば田舎者) が多いテキサス州で、ダラスは保守派の共和党がとくに強い土地柄であったため、ケネディは民主党にテコ入れをするという目的で、出かけたようだ。

空港から市の中心部をパレードしたのだが、そのとき、警備当局は防弾ガラス付きの車を使用するように手配していた。しかし、ケネディ自身がオープンカーを使用することを望んだため、そうすることになった。これが彼の命取りになった。車は大きなリムジン (リンカーン・コンチネンタルをパレード用に改造した特別な車) で、同乗者は、ジャックリーン夫人、テキサス州知事ジョン・コナリー(John Connally)夫妻、大統領警護員2人 (1人は運転手を兼務) の計6名であった。

私は、ダラスに2回行ったことがあり、ケネディがパレードしたコース、銃撃された場所もドライブしたことがある。そのときから既に25年ぐらい経っているのだから、今のダラスのことはわからないが、当時はケネディがパレードしたときと全く変わっていなかったようで、犯人がその6階から銃撃したとされていた建物（教科書倉庫で、目立たない建物だった）も残っていた。

場所は、目抜き通りを過ぎたところにあるディーリー・プラザと呼ばれているところで、道の真向いに、問題の建物があるので、そこで道は左折して、だらだらとした坂を下る。そういう地形だから、元々ゆっくりとパレードしてきた車のスピードは更に遅くなる。つまり、銃撃に最も適した場所に、犯人は陣取っていて、おそらく20メートルから30メートルという近距離から銃撃したのだ。何故ケネディがここを通ったかという点、予定されていた演説の会場がその少し先にあったからだ。

発射された銃弾は3発だったとされており、1発目は外れ、2発目はケネディのどこか（喉仏の下にも腕にも銃創があった）を貫通して、コナリー知事の肺に重傷を与えたとされている。3発目がケネディの右側頭部を直撃し、これが致命傷になった。それは確かだが、この銃弾が本当に教科書倉庫の6階から発射されたものか、別の場所から発射されたかについては諸説がある。

しかし、事件直後に設けられた、連邦最高裁判官のアール・ウォーレン(Earl Warren)を委員長とするウォーレン委員会の報告書では、事件の約80分後に別件で逮捕されたリー・ハーヴェイ・オズワルド(Lee Harvey Oswald)が教科書倉庫の建物の6階から撃った単独犯行だったという結論になっている。ところが、オズワルドは、その2日後に、ダラス市警察本部から郡拘留所に移送される途中に、ジャック・ルビー(Jack Ruby)という人物に拳銃で至近距離から撃たれ、絶命した。ジャック・ルビーも4年後に獄死しており、彼らの間の

関係にはわからないことが多いままになっている。

ケネディ暗殺事件については、多数の出版物があり、映画もあるが、要するに、はっきりしたことはわかっていない。今年、50年目ということもあって、大きな出版物〔著者は、ウォーレン委員会に関係した元ニューヨーク・タイムズ記者のフィリップ・シノン(Philip Shenon)〕も出ており、その訳本は文芸春秋社から出版され、その簡単な紹介が文芸春秋の12月号に掲載されている。それによると、この本の内容は、オズワルドの後ろにソ連とキューバが存在したことを強く示唆するものようだ。

ウォーレン報告書は、いろいろな点で調査が不十分なものであることは間違いないが、これには理由があり、アメリカという国の複雑さを示すものだと言ってよいだろう。何かを十分に調べようとすると、それによって責任を問われることになる可能性のある有力な組織があり、そういう組織はウォーレン委員会の十分な調査をむしろ妨げるのだ。結局、最高裁長官といえども、そういう状況をどうすることもできなかったということだったのだ。そう私は解釈している。これはアメリカという国の現実であり、日本も含めて、どこの国にもあることだと思う。

ケネディは43歳で大統領に選出されたのだが、これはアメリカ史上最も若い大統領の出現だった。彼が掲げた理想主義的な革新の松明は、若い年代を中心に熱狂的な支持を集めたが、その反面、保守層の反ケネディ感情にも根強いものがあつた。ケネディが大統領職にあつたのは3年と10箇月ほどの比較的短い期間だったが、その間には、実にいろいろなことがあつた。冷戦時代の真ただ中であつて、将来への明るさを感じさせたことは彼の功績だった。それが、突然に断ち切られてしまったことは、かえすがえすも惜しいことだった。

彼が2期大統領職にあつたら、その後の世の中はどうなっていただろうか？ 今とは少しは違っていたのだろうか？ 世界中に難しい問題が山

---

積している今、彼のように特別に大きな個人的魅力を持った政治家が出てきて、世の中の気分を一新し、良い方向に引っ張って行ければ良いのだが。

\*\*\*\*\*

6月26日のエッセイ「自分の時間の使い方」に書いたが、自分の時間の使い方について、暫く考えるつもりなので、「エッセイ」は今後暫く休み、その代わりに、簡単に書ける「日記」をこれまでよりも多く書くつもりである。（おわり）